

八幡界隈の魅力を生かした

街並みづくり。

5年前にスタートした「八幡ぼんぼこ市」が、通りのイメージを変えつつある八幡町。藩政期から続く歴史を生かした、人に優しく景観の美しいまちをめざします。「もりおか八幡界隈まちづくりの会」会長・明戸均さんと会長代行・大石仁雄さんに、現在の活動と今後の展望をお聞きしました。



家族連れが多い「八幡ぼんぼこ市」は、材木町「よ市」とは違う楽しみ方ができます

スタートは子どもが楽しめるイベント

盛岡八幡宮に通じる八幡町通り。ふだんは静かな門前町ですが、月に1回開かれる「八幡ぼんぼこ市」は、家族連れや沢山の人で賑わいます。そのはじめりは、平成23年9月に行われた道路改修工事の完成記念イベントでした。

平成16年から盛岡市が進めてきた八幡町通りの電線地中化、融雪道路整備工事。より安全で安心な街並みへ装いを変え、街周辺に賑わいを呼び戻すきっかけになるとあって、盛岡市と地元住民は計画段階から「どういう街にしたいか」をテーマに何度もワークショップを重ねました。そして、平成23年9月に行われた道路完成記念イベントでは「もりおか八幡界隈まるごとフェスタ」を実施。その後も徐々に形を整えながら、気軽に楽しめる昼のイベント「八幡ぼんぼこ市」として定着しました。

開催期間は5月から11月まで。第2または第3日曜日に通りの一部を歩行者天国にして、地元商店や飲食店の屋台を並べるほか、ライブやパフォーマンスなども目白押しです。中でも「雪駄（せった）飛ばし世界大会」は同市の目玉企画。単に人通りを増やすのではなく、人だかりができる企画を考えたとのこと。路上参加型アトラクションの面白さが、「八幡ぼんぼこ市」の大きな特徴です。

住みよく安全な街に

昔から八幡町は酒場のイメージが強く、「暗い、汚い、怖い」という印象もあったようです。月1回、週末の日中にとらりと立ち寄れる「八幡ぼんぼこ市」は、そうしたマイナスイメージを払しょくし、新しいまちづくりの踏み出す大きな足がかり。運営にあたる「もりおか八幡界隈まちづくりの会」の会長・明戸均さんに、八幡町がめざす姿について伺いました。

「市の道路整備に先駆けて、八幡町の良い点・悪い点を掘り起こし、道路完成までに100ページ近い計画書も作成しました。昔ながらの賑やかな街にしたいとの一方で静かな街がいいとか、いろんな声上がる中、「住みよく安全な街にしたい」という



子どもに人気の「雪駄（せった）飛ばし世界大会」。祭りが盛んな八幡町らしい企画



景観づくりの第一弾として「町内に共通デザインの門灯を設置したい」と明戸会長

のが住民の共通認識でした」。

八幡宮の門前町として栄えた歴史がある同町は、30年以上前から続く神輿団体「八青會」を中心に、若い世代が盛り立ててきました。全国レベルで、はしご酒イベントの元祖といえる「八幡はしご酒祭り」も同会の企画によるもの。また、八幡町内の若い世代で構成する「八幡心参会」も、盆踊りなどの地域行事を積極的に盛り上げてきました。お祭りを中心にした「結束力」が下地にあつてこそ、「八幡ぼんぼこ市」につながっていると明戸さんは話します。

「イベントが着地点ではありません。地元住民がイベントを通じてお互いに顔が見える人間関係を積みあげていくことが大事。それを築きつつ、今年からはバリアフリーに対する対応を本格的に進めていきたいと思っています」。

すでに昨年から「社ランプアップいわて」と共同で携帯型スロープの体験会も実施。車いすで楽しめる街にしていききたいと明戸さんは話します。

景観をどうつくるか

江戸時代に盛岡八幡宮が建立されたのち、お茶屋や料亭、貸し座敷など飲食店が並ぶ歓楽街として発展した八幡町。明治時代に火災があつたものの、再び繁華街として復活し、盛岡芸妓が行き交う華やかな時代もありました。八幡町のシンボルといえは路地裏のノスタルジックな酒場街ですが、路面には八百屋や菓子店など生活まわりの店も多く、昭和の懐かしさを残しています。

ここ数年は後継者不足により廃業する個人商店も増え、空き店舗の活用が大きな課題の一つ。しかし、ちらほらと新規参入する若手経営者も出てきたのだとか。「もりおか八幡界限まちづくりの会」の会長代行・大



車いす用の携帯型スロープ体験会

石仁雄さんは、それについてこう感じています。

「幅広いエリアからお客様を呼ぶ力のある店舗が数店オープンすると、それが呼び水になってさらに同じような顧客層を狙う店舗が出店する。そんな流れが自然に生まれています。『八幡ぼんぼこ市』開催日は、夜の飲食店も午後3時頃から開店するなど、徐々に店側に動きが見えますし、日中の人の動きが夜の賑わいにつながっていくと面白いですね」。

イベントは、住んでいる人のつながりを深めるきっかけ。それをスタートにした門前町としての景観づくりは「もりおか八幡界限まちづくりの会」の長期的目標です。

「街並み景観形成への取組みはまだまだ弱い。伊勢神宮のおかげ横丁や善光寺門前町のように統一された空間をめざしたいですが、課題はたくさんあります」と大石さん。

点から面への展開

これからは八幡町をどうするかではなく、盛岡らしさを八幡町からどう発信していくかという視点が大事だと、明戸さんも話します。今年の5月14・15日は、河南地区の別団体が「八幡ぼんぼこ市」を含む同地区のイベント5会場を巡回できる無料バスを走らせる試みを行いました。各エリアに打ち込まれた点を一つの面に展開して河南地区をアピールする動きです。では、各事業所はそん



「イベントがない日でも恒常的に人が集まる仕掛けが必要」と今後の課題を語る大石さん

な活動にどう関わっているのでしょうか。「八幡ぼんぼこ市」の場合、休業日に駐車場を開放するなど間接的に集客しやすい環境づくりに貢献する事業所もあるそうです。

「盛岡の歴史的背景と共に発展してきた河南地区。他の街にはない盛岡らしさの大きな要として、盛岡全体を発信することが大事。一つ何かを始めれば、自然と統一した方向性が見えてきます。それによって、新たな景観がつけられていくのではないのでしょうか」。

そう話す明戸さんの言葉には、八幡町で暮らし、幅広く町内の活動に関わってきた一人としての説得力があります。一過性のイベントに留まらず、町のあり方を長い目で捉える「住み手の視点」は、まちづくりの大切な原動力。そのポテンシャルに大きな期待がかかっています。

取材協力/もりおか八幡界限まちづくりの会